

身体感覚を言葉で表現する言語活動に関する研究
—宮沢賢治のオノマトペを中心として—

小 田 慶 喜¹⁾ 池 田 みよし²⁾
三 浦 敏 弘³⁾

A study on language to express a physical sense by words

— Analysis of Kenji Miyazawa's onomatopoeia —

Yoshinobu ODA¹⁾ Miyoshi IKEDA²⁾ Toshihiro MIURA³⁾

Abstract

It is recognized that Miyazawa's literature is not understood easily. But Miyazawa's onomatopoeia is perceived by his words as an expression of the physical sense experienced in his life.

In the modernized world, human being forgets human essence and physical sense, and is losing sight of environmental problems in future. The effort to train the sense of the body and to express is important, the physical education helps the expression of the sense of the body. The sense of the body is expressed as words and literature. When the body activity is experienced in physical education, the rhythm and the change are drawn out.

The education should offer the civilization and nature feel overall, and a lot of expression activities including the body sense as an important role of the overall education. Expressing the sense of the body by a variety of methods contributes to fostering the sensibility.

1) 姫路獨協大学 〒670-8524 兵庫県姫路市上大野7-2-1
Himeji Dokkyo University 7-2-1 Kamiohno Himeji-city Hyogo 670-8524

2) 兵庫教育大学大学院 〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1
Graduate School of Education Hyogo University of Teacher Education
942-1 Shimokume Kato-city Hyogo 673-1494

3) 関西大学 〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
Kansai University 3-3-35 Yamate-cho Suita-City Osaka 564-8680

I. 表現教育の在り方

健康的な生活が営まれている社会において、人間はそれぞれの個性に応じた表現活動を自由に実施することが精神的健康および身体的健康の基礎となる。その表現方法は多様であり、教育はそれらの画一化を避け、より個性的な表現を尊重することが重要である。特に表現に関する教育は重要で、発育発達に応じた表現活動を積極的に促す必要がある。

幼児教育における表現活動は、「絵画製作」「音楽リズム」が平成2年に改訂・実施された幼稚園教育要領で、「表現」にまとめられて5領域となったように、それぞれの表現領域を分割して考えることには難しさがある。体育は人間の身体運動文化を表現する重要な役割を担っているが、技術的な要素が強調され、自由な表現活動の場としての領域を失う傾向にある。特に発育期の子どもにおいては、技術に固執した教育よりも子ども一人一人の個性を育てる表現教育が重要であると考えられる。

高橋¹⁾は、体育科教育および人間教育の立場から「からだ気づき」という「新しい学びの様式」の実践研究において、表現の幅を広げることの重要性を示唆している。身体表現としてのからだを使ったコミュニケーション能力を高める体験は、創造性を広げ感性を磨く可能性を示し、より健康的な生活の実現の可能性を認めている。また、伴²⁾は「青少年よ、重力と遊べ」と表現し、現代生活において人間が失いつつある二足直立姿勢を再考することにより、重力・空間・時間の3生活要素とともに「生命の躍動」を表現する重要性を強調している。身体や言語による表現活動の充実は、精神的健康の基礎ともなり、人間の精神文化を支える重要な役割を果たす。

現代社会においては、身体運動が抑制され、人間は多くの問題を抱え、身体表現のみならず、言語表現や思考も画一的な方向へと移行しつつある。特に環境問題や自由な表現が規制を受ける問題に関しては、将来の人間や他の生物の存在すら危ぶまれる大きな問題として提起されている。人間は叡智を結集して、文明を築き上げ、より快適で幸福な世界を求めてきたと考えられている。その結果が、現代の人間を取り巻く環境であるならば、

人間の存在について再考する必要が生じている。人間はその感性をつかって、自然や人の心、倫理観を感じる感覚を失いつつある可能性が大である。

世界保健機関(WHO)は、健康の定義を改訂し、「健康とは、身体的精神的社会的かつ、スピリチュアルに完全な一つの幸福のダイナミカルな状態を意味し、決して単なる病気や障害の不在を意味するものではない」として、「spirituality」ということばを入れた。スピリチュアリティとは、精神性や霊性と理解されており、自然界に物質的に存在するものではなく、人間の心に沸き起こってきた観念の領域に属するものといった意味と解釈されている。世界保健機関は、精神性や霊性を人間の暮らしの中にいれていかなければ、健康問題や環境問題、平和問題が解決できないと考えたと推察される。

レイチェル・カーソン³⁾は、「Silent Spring (沈黙の春)」の中で、地球規模での環境汚染に警鐘を鳴らした。さらに、レイチェル・カーソン⁴⁾は、「The Sense of Wonder (センス・オブ・ワンダー)」において、美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見はる感性を育むために、自然を探索し発見の喜びに胸をときめかせる生活を積極的に説いている。

人体科学会関西ワーキンググループ⁵⁾は、「触覚の復権? ころ・からだ・いのちの危機を問う?」として、シンポジウムを開催し、人間のからだやころ、地球環境の問題を考えた活動を強化している。

これらが示すものは、人間が感じる能力を放棄し、その結果、自然の変化も、人のころも感じる事が出来なくなることや心配していることの証明である。現代は、人間教育の中心となる学校教育や社会教育は厳しい時代だと評価され、ゆとりやころの教育の強化がさかんに取り上げられている。昨今、テレビや新聞を中心としたマスコミで取り上げられる多くの悲惨な記事は、ますます荒廃していく人間の世界を写し出しており、身体や精神の教育の重要性が認識されなければならない。

身体や精神の教育において体育の関わるころは多く存在している。斎藤⁶⁾は、国語は体育だ、読書はスポーツだとして、本を読み、感じ、考え、

そしてそのことが人間としての成長につながることを示しながら、国語教育や体育の重要性を説いているが、現実には受験中心の国語教育であり、勝利至上主義のスポーツへと特化する傾向があり、教育界においてもその荒廃ぶりはすさまじいものがあり、人間の本来の精神文化を揺さぶる教育の失墜には将来が危ぶまれる。

感覚や印象を大切に、感性を育てる教育環境および文化支援を整えなければ、これからの人間社会はより荒廃化してしまうのではないのかと考えなければならぬ要素が多く存在している。特に、子どもたちは、ゆたかな母語としての日本語の表現を学ぶことを真剣に考えなければ、ことばだけでなく、こころやからだ、さらには地球環境の変化についても感じることの出来ない人間の育っていくのではないかとの不安と疑問が存在する。そこで、身体運動文化としての日本語教育と体育の立場から、感覚や印象をことばで表現する言語活動に注目して検討を試みた。

II. オノマトペによる表現の理解

田守⁷⁾によると、オノマトペとはフランス語の *onomatopée* に語源を持つ外来語であり、英語では *onomatopoeia* という。いずれも「命名する」というギリシャ語の *onomatopoiia* (*onoma* 'name' + *poiein* 'to make') に由来するとされている。LONGMAN DICTIONARY OF CONTEMPORARY ENGLISH⁸⁾ によれば、*onomatopoeia* について、「the formation of words that are like natural sounds (as when the word CUCKOO is used to name the bird that makes the sound)」と説明されている。ジーニアス英和辞典⁹⁾ では、*onomatopoeia* について、「擬音、擬声；擬音（声）の；声喩法の」と説明している。

このようにオノマトペとは、フランス語に語源を持つ擬音語・擬声語・擬態語・擬情語を意味する外来語で、直接的な音の模倣による表現、または音により感覚的印象を表すことばで、人間の笑い声や動物の鳴き声を表現する場合のように、感覚や身体行動を「運動」あるいは「動き」という

次元で表現する特性をもつと同時に、心の動きを表現する場合に用いられる。このように音形と意味との間に有縁性があり、印象や感覚を表現することは重要な人間活動である。さらに生物、無生物、自然の変化・現象・動き・成長などの状態・有様を描写的・象徴的に表すことも重要な人間の表現活動である。このような表現活動を行なう場合、人間の感性は大いに刺激され、表現能力が問われることになる。これらの擬音語、擬声語、擬態語、擬情語をことばで表現する能力は、背景としてゆたかな感性が育てられていることが必要で、画一的技術の享受だけでは表現できないと考えられる。ゆたかなオノマトペを使った文章を表現できる者は、印象や感覚が研ぎ澄まされており、これからの日本語教育の指導に役立つと考えられる。

擬音語は、人間の笑い声、動物の叫び声、物の壊れたり、打ち当たったりした時などに出る音など生物や無生物の実際の音を真似て言葉とした語であり、人や動物の声を写した言葉を擬声語として区別する場合もある。擬態語は生物、無生物、自然の変化・現象・動き・成長などの状態や有様を聴覚以外の感覚印象で、描写的・象徴的に表現した言葉である。視覚、触覚などを言葉に表したものと、人間の心情や感情を描写したものを擬情語として区別する場合がある。

福本は¹⁰⁾、オノマトペの表現を五感に分けて考察すると、興味深い発見があるとして触覚の表現的性格に注目し、五感のすべてが触覚に還元されると説明し、ともすれば軽視されがちな触覚の重要性を強調している。人間の五感は、平均して平等に働くわけではなく、個人の生理的機能や生育環境にも影響を受けている可能性があり、人間としての個性を表現する部分でもある。

井上^{11) 12)} は、「音そのものとその音を入声にかえてできた擬声語、このふたつの関係が必然であれば、その擬声語は、わたしたちのコトバを豊かにする力をもつが、文学者たちにはこの擬声語はずいぶん評判がよくないようで、たとえば三島由紀夫は親の仇にでも出逢ったように擬声語を叩く」として、オノマトペの存在を井上本人は肯定的に受け入れているが、オノ

マトベの濫用は、言語の墮落した形であるとする文学者もいることを述べている。井上が取り上げている、三島¹³⁾は『擬音詞の第一の特徴は抽象性がないということであり、それは事物を事物のままに人の耳に伝達するだけの作用しかなく、言葉が本来の機能を持たない、墮落した形であります。これが抽象的言語の間に混ざると、言語の抽象性を汚し、濫用されるに及んでは作品の世界の独立性を汚します』として、オノマトベを否定する態度をとっている。三島は完全にオノマトベを否定しているわけではなく、『擬音詞は日常会話を生き生きとさせ、それに表現力を与えますが、同時に表現を類型化し卑属にします』とも述べていることから、日常会話におけるオノマトベと文学としてのオノマトベの使い分けを示している。文学作品としての格調を高くするためには、日常の会話で用いられるオノマトベを極力使わないようにすることが、書き言葉としての文章を発展させ優れたものとすると考えたようである。日常会話をそのまま文章にすると、如何に稚拙な会話をしているのかと誤解される場合もあるが、逆にオノマトベを書き言葉として意図的に用いる方法は、内面的表現の一部と考えられる。後で取り上げる宮沢賢治などは、その傾向が強くあらわれている作家であり、三島の取り上げた森鷗外とは反対のタイプとして、味わいのある文章を提供していると解釈されている。

Ⅲ. 感性を育む表現教育

オノマトベとは、フランス語に語源を持つ擬声語・擬音語・擬態語・擬情語を意味する外来語である。オノマトベは、感性による感覚印象を言葉で表現する言語活動であると考えられている。日本語教育においては、異文化理解の領域での実践的コミュニケーションにおいて、オノマトベが使用される場合、各地域独自の言語や風土・文化が影響を与えることが考えられる。特に、運動の「コツ」を表現する際の言葉として体育スポーツの分野などでは運動者の運動技能の学習と遂行に貢献している可能性が高い。異文化コミュニケーションの分野でも、通常の言葉では表現しにくい微妙

なイメージや感覚印象を端的に言い表すことができ、意思の伝達に貢献していると考えられる。異文化理解におけるオノマトベは重要な役割を果たしている可能性が高く、身体運動表現として共通の理解を促すことに貢献し、感性の表現にも貢献している。

さらに、感性によって感覚印象を言葉で表現する言語活動をより豊かにするためには、豊かな自然に恵まれた環境の中で生活することが効果的と考えられる。人間が日常生活の中で疲労困憊し、逃避していきたくと考える環境が、人間が最もリラックスでき、豊かな感性を発揮できる環境と考えることができる。人間がリラクセーションの方法として活用しているコンサート等での音楽鑑賞、美術館での芸術作品の鑑賞、文学作品の熟読、粘土をこねてろくろを回す陶芸、アロマセラピーでの臭覚を刺激、茶道や華道の伝統文化の伝承活動も重要であるが、野外教育に求められている自然の中に入り込み身体活動を実施することにより、より人間の感性は刺激されることが多くの事例として示されている。さらにそれらの体験を表現すると努力することが重要であることも注目されている。

言語教育や身体教育の基本は、感性を育てる教育に通じると考えられる。感性を駆使して、文章を味わうとか楽しむことが重要であると考え、日本語教育において、外国人には極めて理解され難い、感覚や印象を言葉で表現する言語活動が言語教育の基礎として必要になる。特に、運動の「コツ」を表現する際の言葉として、体育やスポーツの分野などでは運動者の運動技能の学習と遂行に貢献している可能性が高い。異文化コミュニケーションの分野でも、通常の言葉では表現しにくい微妙なイメージや感覚印象を端的に言い表すことができ、意思の伝達に貢献していると考えられる。

藤野¹⁴⁾や外山¹⁵⁾は、スポーツ領域で使用されているオノマトベをスポーツ・オノマトベとして注目し、スポーツ技能の獲得・発揮法及びスポーツ指導における効果的な教示法としての擬音語・擬態語であるオノマトベの可能性を探る調査・研究をすすめている。この領域は、ことばで表現や動きを伝えることの重要性を考える、新しい研究分野となる可能性がある。

IV. 宮沢賢治のオノマトベにみる表現²⁰⁾²¹⁾²²⁾²³⁾²⁴⁾²⁵⁾

オノマトベを駆使した作品が有名で、多くの研究者が注目し読者も多いのは宮沢賢治である。宮沢賢治は、小学校、中学校に共通して使われている作品を書いており、小学校と中学校に共通して使われている感性を共通して表現できる存在は極めて少ない。宮沢賢治の作品は、幅広い年齢層に受け入れられ、親しまれ、愛されている証拠でもある。幅広い年齢層が愛着を作品にはどのような魅力があるのかを、宮沢賢治の「やまなし」という作品を取り上げ、その魅力の分析を試み、オノマトベの存在が表現に与える影響を考察した。

この作品は散文調でかかっているが、賢治自身はこの作品を、自分が名づけた「花鳥童話」という分類の中に入れていた。多くの年齢層に受け入れられているが、現在の小学校で学ぶ学童には、理解が難しくなった作品であるとの評価もある。以下に「やまなし」に使われているオノマトベについて簡単に示す。

「やまなし」の概要

谷川の底を写した二枚の青い幻灯。五月五月の日光がふりそそぐ水底で蟹の兄弟がクラムボンの話をしていると、突然、外から黒く尖ったものが侵入、頭上の魚を掠ってゆく。驚きのあまり居すくまっている子蟹たち。父蟹がかわせみだと教えなだめるが、子蟹たちのふるえは容易におさまらない。

十二月月の夜、泡の大きさ比べをしている子蟹達の前に、今度は大きく熟したやまなしの実が落ちてきて、流れてゆく。やがて木の枝にかかり、月光の虹を集めるいい匂いのやまなし。父蟹は、沈んでお酒になるのを待とうという。

この作品は、独特の世界観があり、たくさんの不思議な世界が出てくる。この不思議な世界の不思議なものにせまることを中心に考えてみよう。

身体感覚を言葉で表現する言語活動に関する研究—宮沢賢治のオノマトベを中心として—

かぶかぶわらったよ。

つぶつぶ暗い泡が流れて行きます。

ぽつぽつぽつとつづけて五六粒泡を吐きました。

つうと銀色の腹をひるがえして、一疋の魚が頭の上を過ぎて行きました。にはかにパツと明るくなり、日光の黄金は夢のやうに水の中に降つて来ました。

ゆらゆらのびたりちゝんだりしました。

魚がこんどはそこら中の黄金の光をまるっきりくちやくちやくにしておまけに自分は鉄色に變に底びかりして、又上流の方へのほりました。

俄かに天井に白い泡がたつて、青びかりのまるでぎらぎらする鉄砲弾のやうなものが、いきなり飛び込んで来ました。

ぶるぶるふるえてゐるじゃないか。

キラキラツと黄金のぶちが光りました。

三疋はぼかぼか流れていくやまなしの後を追いました。

その上には月光の虹がもかもか集まりました。

波はいよいよ青白い焰をゆらゆらとあげました。

このように「やまなし」には、さまざまなオノマトベが使われ表現されている。

宮沢賢治が使うオノマトベは、一般的には現在の日常生活であまり使われていない表現が多い。しかし、その表現されているオノマトベは、目を閉じればすぐにでもその世界にいけそうなくらいリアルなものであり、音読することにより多くの子どもたちが興味を示す部分でもある。子どもたちの反応を観察することにより、宮沢賢治の表現能力の鋭さが作品を通じて伝わってくる体験をすることが出来る。

小嶋¹⁰⁾は、オノマトベの象徴化の必要条件として、以下の4つを挙げている。

- ・所与の聴覚印象の表現は作者が既に自己の内に持っている感情、又は、その印象によって触発された情感との関連上、どうしてもオノマトベ

によらなければならないこと。

- ・その表現は、その場合、どうしてもそのオノマトベによらねばならないこと。
- ・そのオノマトベはその文章で、構文および構想上どうしてもその位置でなければならないこと。
- ・そのオノマトベ表現を含む文章は、その一語を取り除くと、表現価値を低下し、文体のぶち壊しになること。

例えば、「やまなし」に出てくる「くらむぼんはかぶかぶわらったよ」という表現があるが、この「かぶかぶ」というところを違うオノマトベを入れ替えてみると、読者の受ける感じが変化することに注目する必要がある。この「かぶかぶ」という言葉のイメージは「かぶかぶ」の「ぶ」という音は水の中の音に近いような感じがするところが重要である。水に浮いているときに使うオノマトベとして「ぶかぶか」というのがあるが、それを参考にして「かぶかぶ」としたのではないかと分析できる。笑う表現をあらわすオノマトベとしては、「げらげら」、「くすくす」、「ふっふっと」、「にこにこ」、「にやにや」などが挙げられるが、どうもしっくりこないのも感じることができる。研究者の間では、「くらむぼん」については、その存在が問題となっており、実際には何かが特定できないのであるが、とりあえず笑っているのである。その笑いというのは水の中で何かを見て笑うのではなく、自然に出てきたような笑顔で笑っているのだと考えることができる。しかも「くらむぼん」は、楽しくはねて笑ったりしているのである。「やまなし」の世界は水の中である。水の中の、水に関係するオノマトベは「ぶかぶか」、「じゃぶじゃぶ」、「もごもご」、「ゆらゆら」、「ぶくぶく」、「ばちやばちや」、「ぶくぶく」などである。表現そのものが水の擬音語、擬態語を表していることが多いと分析できる。これは身体が水の中で感じる表現なのである。

つまり、小嶋¹⁰がいう、どうしても、そのオノマトベでないといけない、その場所でないといけない、その位置でないといけない、それがなくなる

と文章の存在感が無くなってしまおうというのがオノマトベを巧みに使い、物語に息を吹き込むことの、絶対条件なのである。それがあからこそ「やまなし」という感性豊かな表現の作品ができたのである。

ここでは、クラムボンとは水中から見ることのできる光として理解することができる。作品中の子蟹達は川の底から天井を見ているの状況で、水面が網のようにゆらゆら揺れているように見えているのである。そこに、日光が入ってきてさらに、きらきら揺れ出し、川の流れも手伝って、生きてるように見えているのである。さらに、本文ではこのように、続いている。

「魚がつうと銀色の腹をひるがえして、一疋の魚が頭の上を過ぎていきました。」

「クラムボンは死んだよ」

「クラムボンは殺されたよ」

「クラムボンは死んでしまったよ」

「殺されたよ」

「それならなぜ殺された」

兄さんの蟹は、右側の四本の脚の中の二本を、弟の平べったい頭にのせながら云いました。

「わからない」

魚がまたツウと戻ってきて下流の方へ行きました。

「クラムボンはわらったよ」

「わらった」

光の網を魚が壊しながら、泳いでいる、光の網がクラムボンならば、魚によって壊されて、死んだことになる。そして、魚によって殺されたのである。しかし、その後、魚は下流の方へ行ってしまおうので、ふたたび、きらきらして、ゆらゆらしている水面に戻ってきて、光の網が笑っていたり、跳ねていたりしているように見えるのではないかと分析できる。私たちの日常生活において、川の流れを上から覗き込む経験はしているが、水中に

生活する生物の目になって光を感じる体験は少ないのが実情である。この体験を蟹や水草の立場から表現したのがクラムボンではないかと分析できる。

クラムボンについては、宮沢賢治の妹の「トシ」のことではないかと解釈する考え方も存在している。クラムボンは笑った→死んだ（殺された）→笑った、と変化しているとの分析もある。宮沢賢治の『永訣の朝』の本質は、「ああとし子死ぬといふいまごろになってわたくしをいつしやうあかるくするために」という表現である。妹のトシが死んで、非常に悲しかったが、その悲しさの原因であるトシが少しずつ変化していついていけるとも解釈できる。死の向こうにある明るい笑いに出会おうとして、最後にクラムボン＝トシを笑わせたのではないか。

さらに原¹⁷⁾の「新 宮沢賢治語彙辞典」はクラムボンについて、次のような解釈をしている。童「やまなし」の中で蟹の兄弟が交わす掛け合い言葉の中に登場する意味不明の語。一説ではcrab（クラブ、蟹）のもじり（小沢俊郎、福島章→蟹）。十字屋版全集の六巻注等では、アメンボのたとえとし、恩田逸夫はプランクトンからの連想と考える。ギルモアのフランス語訳（1935）では蛙（crapaudひきがえる）になっているが、英語では相手の言葉に対しての同韻の言葉を考え出す遊びにcrambo（クランボウ）というのがあり、またcrampon（英、仏とも、クランボン、氷屋などが氷塊をつかむはさみ、あるいは氷上を歩く鉄のかんじき）等も連想源としては考えられるとしている。盛岡高等農林で賢治の後輩板谷栄城は、高農時代ガラス器具を挿んでスタンドに固定する金具を化学用語でクランプといったこと、さらに、賢治のころ、クラリネットなどの楽器の輸入先、ビュフェークランボン社（Buffert-Crampon現在も日本支社がある）の名もヒントだったのではとも解釈している。ほかに、cramp（クランプ、けいれん）や、clump（クランプ、木立ち、かたまり）等、あるいはエスペラント語の「クランボ」（キャベヂの一種）に目的格のン（n）のついたものという解釈もある。また文意からは、泡の様子や水面の反射光等の擬態語も

考えられる。だが、この童話では、そうした語彙追求よりもあたかも、水の流れや、反射光の微妙な変化と躍動が直接伝わってくるような語感の響きの妙さを味わうべきだろうとも表現している。この作品については、語感を身体で感じることや表現することが重視されるべきであろう。

「クラムボン」は読者の想像を期待した宮沢賢治の思惑があり、そこに「クラムボン」の意味があるのではないかと分析できる。すなわち、クラムボン＝身体をつかって想像することとなるのである。宮沢賢治は、ここまで考えて作品を生み出している可能性が高い。

教科書にやまなしが採用されているが、そこでの説明はこのクラムボンは「作者の作った言葉。意味はよく分からない」と示されている。読者である子どもたちは想像力を働かせて自由に考えることを要求されているのである。まさしく、自由に発想し身体で感じて欲しいという、宮沢賢治の願いが子どもたちに伝わっており、これから最も必要とされる教育の手腕が示されているのである。

オノマトベは様々な使い方があり、書き手の使い方によって、同じオノマトベであってもまったく違う意味になることもあり、その場面がまったく変わってしまうことが理解できる。一般的には、誰も思いつかないであろうオノマトベを巧妙に使い物語の世界をいっそう鮮やかにし、輝かせることの可能なオノマトベの魅力は、身体の表現にも大きく影響を与える。難しい言葉を使って表現するよりも、ひとことオノマトベを用いて表現したほうがより簡単にわかる使い方が理解できる。宮沢賢治が作品を書くときの、オノマトベに対する悩みや苦しみや葛藤が、すばらしいオノマトベとなって表現できたことは事実である。既成の概念に捉われず、感性豊かな感覚語をたくさん作り、そこから多くのことを読者に想像させるという、文学としての表現の楽しみを作り出した宮沢賢治の創造力には多く学ぶものがある。

V. まとめ

宮沢賢治の作品において、オノマトペは宮沢賢治のオノマトペとしての独特の存在感がある。宮沢賢治の考える世界観は、人間の根本すなわち我々の本質を見ようとしていない現代人への警鐘のように考えられる。近代化された世の中で、人間の本質を忘れ将来の方向を見失いつつある人間へのメッセージではないかと考える。

病める現代社会において、身体運動が抑制され、人間は多くの問題を抱え、身体表現のみならず、言語表現や思考も画一的な方向へと移行しつつある。人間はその感性をつかって、自然や人の心、倫理観を感じる感覚を失いつつある可能性が大である。身体運動文化が求めるものは、まさしく生の教育であり、環境問題などの現代の人間を取り巻く環境の変化や人間の存在について、考えることを優先する教育でなければならない。

身体表現の重要な部分は、リズムを持った生活表現であり、身体運動と同様にことばの表現もリズムを重視することが重要である。宮沢賢治は、その作品においてリズムに富んだオノマトペを駆使し、宮沢賢治のオノマトペには存在感がある。教育において最も心配されるのは、画一化された教育において、ひとつの表現に固執する生き方を方向付けられることである。感性豊かな表現は、豊かな自然の中で多くの体験を重ねることにより生み出される。動物や鳥や虫の鳴き声も、画一化されて表現される表現教育の在り方は、人間の文化的活動に制限をかけて、画一的な評価方法で物事を単純に判断する傾向に陥ることが心配される部分でもある。

人間の表現は多種多様であり、多くの評価方法が存在しなければならない。辰濃¹⁹⁾は、人間の日常は「文明性の原理」に貫かれているが、体内の奥深くには、人類誕生以来の「自然性の原理」が脈々と生きていることを示し、文明性の原理の勢いが強くなればなるほど、人間の中の自然性のエネルギーを奪うことを説いている。大都会にいれば、息苦しくなり緑が恋しくなるのは、自然の原理からほとばしる悲鳴のようなものだと説明している。

身体感覚を言葉で表現する言語活動に関する研究—宮沢賢治のオノマトペを中心として—

川本²⁰⁾は、人間の行なう主体的な行動は、生物的な（自然）のレベルの営みではなく、すぐれて（文化）的なレベルの営みであることを説き、人間の用いる言語やその言語に反応する部分は、本能として埋め込まれたものではなく、後天的に習得されなければならないことが重要であり、自然の本能に基づく絶対性とは対照的に、文化を特徴づける恣意性の存在を認めている。

教育は総合的に文明性や自然性を享受する必要があるが、身体表現を含む多くの表現活動は、総合的教育の重要な役割を担っている。

引用文献

- 1) 高橋和子、からだ—気づき学びの人間学—、見洋書房、2004.
- 2) 伴義孝、二足ロコモーションの意味論、関西大学出版部、2000.
- 3) レイチェル カーソン、沈黙の春、新潮社、2001.
- 4) レイチェル カーソン、センス・オブ・ワンダー、新潮社、1996.
- 5) 人体科学会関西ワーキンググループ、触覚の復権?—こころ・からだ・いのちの危機を問う?、竹田勝写堂、2002.
- 6) 斎藤孝、理想の国語教科書、文藝春秋、2002年.
- 7) 田守育啓、オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ、岩波書店、2002、1-37.
- 8) LONGMAN DICTIONARY OF CONTEMPORARY ENGLISH、Longman Group Ltd.、1978、762.
- 9) ジーニアス英和辞典、大修館書店、1998、1253.
- 10) 大阪芸術大学工芸学科染織研究室、『PORTFOLIO 采／綴 大阪芸術大学 染織 2000-2001』、大阪芸術大学出版部、2001.
- 11) 井上ひさし、私家版日本語文法、新潮社、1981.
- 12) 井上ひさし、自家製文章読本、新潮文庫、1987.
- 13) 三島由紀夫、文章読本、中公文庫、1995.
- 14) 藤野・吉川、スポーツ・オノマトペ?スポーツ領域で使用されているオノマトペの実態とその使用意識?、日本スポーツ心理学会第28回大会研究発表抄録集、2001.
- 15) 外山・吉川、指導者のスポーツ・オノマトペに関する使用意識と使用実態?バレーボール指導者に対する調査から?、2002.
- 16) 小嶋孝三郎、現代文学とオノマトペ、桜楓社、1972.
- 17) 原 子朗、「新 宮沢賢治語彙辞典」、東京書籍、1999.
- 18) 辰濃和男、文章の書き方、岩波新書、1994.
- 19) 川本茂雄、ことばとイメージ、岩波新書、1986.
- 20) 石井時司、宮沢賢治必携、學燈社、1981.
- 21) 統橋達雄、宮沢賢治研究資料集成第18、19、20巻、日本図書センター、1992 3) 佐藤通雄、

- 宮沢賢治の文学の世界 短歌と童話、泰流社、1996.
- 22) 奥田逸夫、原子朗、小沢俊郎共編、宮沢賢治論 1、2、3、東京書籍、1981.
 - 23) 宮沢賢治、風の又三郎、岩波書店、1994.
 - 24) 宮沢賢治、校本 宮沢賢治全集第十巻、筑摩書房、1944.
 - 25) 西郷竹彦、宮沢賢治「やまなし」の世界、黎明書房、1994.